

平成 23 年 11 月 30 日

平成 23 年度東北地区大学図書館協議会
フレッシュ・パーソン・セミナー グループ討議報告書

東北薬科大学附属図書館
村木 麻衣子

3 班では、田上氏（東北福祉大学）をアドバイザーに迎え、各自が発表を行った後、問題点や改善案についての討議を行った。業務上、企画や広報に携わることのない参加者もいたが、担当職員から事前に話を聞いた上での発表がなされた。

1. 現在行っている企画、広報、PR

複数館から現在取り組んでいると報告がなされたのは、次の 5 点である。

- (1) 図書館報の発行
- (2) 企画展示
- (3) 利用案内等のガイダンス
- (4) 学生・教職員による選書
- (5) 図書館ホームページ（以下、HP）の設置

上記 5 点に関しては、実施していない図書館もあるが、多くの参加館が取り組んでいた。特に(3)については、講義の一環としてカリキュラムに組み込んでいる図書館や、ガイダンスを受けなければ書庫への入室許可が下りない図書館があり、各館で利用者教育を重視している傾向が伺える。また、図書館 HP は全ての図書館が設置しており、資料の予約や文献複写依頼などの web サービス、新刊情報や企画に関するメール配信などが行われている。ユニークな試みとしては、次の 4 点が挙げられた。

- (1) 図書館キャラクター（以下、トキャラ）による広報
- (2) 貸出・来館数に応じた景品の贈呈
- (3) 廃棄予定の図書を用いた古本市
- (4) 季節のイベントに関する催事

トキャラは、2011 年現在、宮城県内では確認出来るだけで、東北大学の「はぎのすけ」、宮城教育大学の「MUE（ムエ）」、他公共図書館 2 館の計 4 館に存在する。両館のトキャラは学生からの公募で決定され、グッズやツイッターなどの広報活動に使用されている。

2. 現在の取り組みに関する問題点と改善策

まず、利用者教育に関する問題である。ガイダンスが必須となっている館もあるが、任意参加の館では、一度も図書館を訪れることがない学生が存在するという報告がなされた。図書館に存在する資料を有効に活用して貰うためにも、新入生対象のガイダンスは必須とし、情報探索などの利用者教育は適宜行っていく事が望ましい。

次に、企画展示やイベントに関する問題である。企画展示は、今まであまり利用されていなかった資料との出会いを演出し、利用者の増加に効果的である。しかし、1つ1つの展示期間が長くなると、利用者が変化を感じられず、停滞した印象を持ってしまわないかとの疑問が上がった。展示に掛かる職員の労力は大きく、大きな展示を短いサイクルで行っていくのは困難である。したがって、小さな展示を複数行うなど、訪れる度に図書館の変化を感じられるような工夫が必要ではないかとの提案がなされた。

来館・貸出数に応じた景品の贈呈は、実施期間中は利用者数が増加したと報告があった。

しかし、景品に掛かる費用の確保や、継続的な利用の増加に繋がらないなどの問題が上がった。図書館を訪れるきっかけとしては有効であるが、その後も図書館に来たいと思わせるような仕掛けを考えていく必要がある。

最後に、広報に関する問題である。図書館での取り組みを周知するための手段として、メールでの告知、HPへの掲載、ポスターの掲示などが挙げられた。メールでの告知は効果的であると報告がなされた一方、HPへのアクセスは少なく、有効な手段とはいえないという意見もあった。HPに関しては、ポスターなどの掲示物、配布物へURLやQRコードを載せて存在を認識させるだけでなく、自発的にアクセスしたいと思わせるような魅力が求められる。しかし、定期的に職員の異動が行われる大学図書館においては、人材の確保が難しく、専門の職員の配置が課題となっている。

3. 今後取り組みたい企画・広報・PR

図書館報の発行や企画展示については、現在取り組んでいない図書館から今後の実施を目指したい旨発言があった。小規模館では大掛かりな企画展示を行うのは困難であるが、旬の話題を取り扱った小さなコーナー展示など、可能な範囲での実施が期待される。また、分館を持つ図書館からは、各々が単独で行うのではなく、連動した企画展示の実施へ意欲的な声が上がった。図書館報を発行している館からも、簡単なミニペーパーを作成し、カウンター横に配置するなどの案が挙げられた。図書館報の発行や企画展示に関しては、職員に負担の掛かる大規模な取り組みの回数を増やすのではなく、小規模なものを回転よく行っていくことで、「変化のある図書館」を印象付ける事が出来るのではないかとされた。

先だって100周年を迎えた東北大学附属図書館においては、トキカラ「はぎのすけ」が公式アカウントを持ち、ツイッターで広報を行った。これに対し、学生から多くのメッセージが寄せられたとの報告があった。ツイッターは、どこからでも好きな時間に利用できる気軽なツールとして、学生に対し有用な広報手段と考えられ、今後の活用を検討したいとの声もあった。しかし、SNS上の不用意な発言が元となってトラブルが起こる事例もある。導入の際には、職員間でのルール共有と慎重な言動が求められる。

学生や教職員による選書は現在も行われているが、今後もより一層の連携を図り、ニーズの把握に努めていきたいと複数館から発言があった。また、学生の多くは先輩から大きな影響を受けている。そのため、教員や研究者と密な連携を図ることで、院生や学生に対し図書館の取り組みが浸透するという効果も期待される。

4. おわりに

討議の中では、多くの参加者の口から、教職員との連携といった言葉が上がった。図書館は図書館、教職員は教職員と垣根を作るのではなく、教育に携わる身として一致団結して協力していきたいというのが、今回の討議において全員が抱いた希望であった。無論、図書館内でも係の枠を超え、よりよい図書館にするためにどうすべきか全員で検討し、協力することが可能な体制作りが必要である。

今回の討議では、自館では行われていない取り組みや、他館ではどのように取り組まれているのか疑問に思っていた点など、普段の業務では知りえない情報を交換することが出来た。これもまた、枠を超えた取り組みの1つであると感じる。これをきっかけに、図書館内、大学内に留まらず、東北地区の大学図書館として広く連携を図っていくことを期待したい。

以上